

東京農業大学の沿革

榎本武揚と横井時敬

創設者は、明治の英傑榎本武揚だ。明治政府で逓信相、農商務相、文相、外相、などの要職を歴任した榎本は、明治24（1891）年、東京に「私立育英黌」を設立した。その農業科が東京農学校、東京高等農学校と名を替えつつ、拡充の歴史を歩み、今日の東京農業大学となる。

東京農学校時代の明治28年、評議員として参画したのが、明治農学の第一人者横井時敬だった。「人物を畑に還す」「稲のことは稲にきけ、農業のことは農民にきけ」と唱えて、「実学」による教育の礎を築き、東京農業大学の初代学長を務めた。本学の「生みの親」は榎本、「育ての親」は横井である。

傘下に東京情報大学

東京農業大学は、農学部、応用生物科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部、生物産業学部、短期大学部の6学部22学科からなり、大学院は2研究科19専攻体制が整っている。世田谷、厚木、オホーツク（北海道・網走）の3キャンパスに学生・院生ら約13,000人が学んでいる。

学校法人東京農業大学の傘下に、東京情報大学（千葉）がある。総合情報学部1学科、大学院1研究科で、学生・院生は約1,900人。傘下には、他に併設校として農大一高／中等部（東京）、同二高（群馬）、同三高／附属中学（埼玉）がある。

学校法人東京農業大学戦略室

東京農大創立125周年記念シンポジウム 「食と農」の将来

— 「しあわせのものさし」 持続可能な地球環境をもとめて —

東京農大創立125周年記念イベントの一つ、シンポジウム「食と農」の将来—「しあわせのものさし」持続可能な地球環境をもとめて—が9月17日、東京農大アカデミアセンター横井講堂で開かれた。同シンポジウムには、東京農大「食と農」の博物館（江口文陽館長）で9月25日まで開催されていた、特別展「地球の記録20年の写真展」の報道写真家、ピーター・メンツェルさんとジャーナリストのフェイス・ダルージオさん夫妻がゲストとして参加した＝写真左。

パネルディスカッションでは、東京農大の高野克己学長（生物応用化学科教授）、志和地弘信・国際農業開発学科教授、吉野馨子・食料環境経済学科教授、鈴野弘子・栄養科学科教授、高橋信之・食品安全健康学科准教授のパネリスト5人が、それぞれの専門の立場から意見を述べた（司会は山本祐司・生物応用化学科教授）＝写真右。特に「飢餓は、食物の不足によってもたらされるのではない。輸送システムが機能していないことが一番の要因だ」「飢餓は社会不安によってもたらされる」「真の民主主義のあるところには飢餓は存在しない」「飢餓は政治と分配の問題」と世界規模で課題解決に取り組む必要性が訴えられた。また、肥満の問題など、食と農の将来について多角的な観点から議論が交わされた。

ゲストのメンツェルさんとダルージオさんは講演も行い、貴重な体験を披露した。

